

新幹線の下りホームに、ヒールの爪先が触れた瞬間、遙は頭の先に稲光が突き抜けるような痺れを感じた。

「帰って来たんだなあ」

およそ一年振りの帰郷だった。胸の奥で、自分の声がころころ転げて、繰り返し聞こえる。「ああ、」とため息ともつかない声がそれに重なった。反射的に視線が、駅舎のガラスの向こうに走った。斜め前方に山の稜線が見える。弥彦山だ。昔とちっとも変わらない弥彦山。帰省するたびに、その山を目にすると、親の懷に抱かれるような安心感が体を包む。懐かしさが沸き上がって止まらないのだった。

その稜線の奥が、夕映えの名残りのように、ぼんやりした朱色に染まっていた。黒い山影を目に残しながら、遙は下りエスカレーターに乗った。そしてタクシーに乗るか、徒歩で実家に向かおうか思索した。歩くには少し遠い距離がある。駅舎から外に出ると、この地方特有の季節風が遙の体を絞めつけてきた。遙は思わず、ぶるっ、と身を震わせ「おーさぶ」

久しく使ったことがなかった田舎訛りが出た。だが、寒さの度合いは、昔の方が、もっと厳しかったと思う。

タクシーの運転手が、客待ち顔でその場に佇んでいる遙を、目線で車中へと、自動ドアを開けた。遙は、余りに冷たい風に怖気づいて、機械仕掛けの人形のように、タクシーに乗り込んだ。

「どちらへ」

遙はシートの奥へ腰をずらせながら、行き先を告げた。

「東京かららかのー？」

運転手は新潟弁特有の抑揚をつけて、声をかけた。

「えーまあ」

厳密に言えば東京ではないが、言い直すのも億劫だった。

、「やっぱり、こちらは寒いですね」

東京からかと言われた手前、標準語で答えなければならないような暗示にかかって、言葉が固まった。

「だろも、まだあ、暖ったけえ方だこてね。雪

も降らんしのー」

運転手は前方の車の流れに注意を払いながら答えた。丁度、信濃川に架かる橋へ曲がる車線に入った。遙の実家はこの橋を渡り切って産業道路を東に向かって走り、十四、五分の距離にある。昔は農道だったが、車で走ると土埃がもうもと立った道である。が、今は何倍も広くなり、立派に舗装されて町の幹線道路に変わっている。遙は窓外を眺めながら、すっかり家並に変わってしまった風景に、目を閉じた。

果てしなく黄金色に広がる秋の風景がよみがえり、稲穂の匂いまでも、鼻孔を膨らませるように感じた。

新興住宅地が変わってしまった何の変哲もない町並みに、感慨も沸いてこないし、愛着

も持てない。ただ同じこのあたりの畦道を、稲束を担いで、よたよた歩いている七、八歳の頃の自分の姿を思い出して苦笑が漏れた。農繁期には猫の手も借りたい忙しさで、否応なしに農作業を手伝わされたものだった。そこで遥は実家への道にさしかかったのに気づいて

「そこを右へ行って下さい」

と運転手に告げた。村へ入る西側の道だった。帰郷する度に、そのあたりが様変わりしているのを、承知していたが、全く変わり果てている。

昔は、お化けが出ると騒がれた場所で、様々な木々が、鬱蒼と茂って、風が出ると不気味な唸りをあげた。通称、森下と呼ばれていた。あの頃の森を想像しながら、急に遥は「ここで、下してください」

と言った。ちよつと、不気味な気もしたが、もう子供ではない。少し歩くと森のあった奥には、村ではかなり、大作の農家の屋敷があった。

門口の左側に築山があつて、白木蓮の大木が聳えていた。五月になると、見事にひらく白い花びらに、口をあんぐり開けて、見とれていたことがあつた。

ここの奥様は色の白い上品な顔立ちの人だった。赤銅色の腕をむき出しに、働き詰めだった自分の母と比べながら、遥は胸が熱くなった。その人もとうに亡くなり、今は跡を継ぐ人も、嫁も貰わず、ひっそり静まり返っている。その前を通り過ぎ、道の交差する場所を突っ切ると、遥の親戚の屋敷があつた。兄の話では、つい先日、後継ぎが亡くなって、老夫婦二人になってしまったらしい。この家もこそと静まり返っている。昔、村は二十三軒の戸数であつたが、今現在専業農家はほとんどないに等しい。後継者がいない、村の西側は、活気が感じられなかった。

すっかり寂れてしまった村を、遥は暗い気持ちで歩いた。こつこつと自分の足音だけがついてくる。やがて村を西と東に分ける川の袂に差し掛かった。足がその手前で自然にびたりと止まった。

何の変哲もないコンクリートの橋がかかっている。遥はその橋を渡るのが躊躇われた。暫くそこに佇んで川面の黒々とした流れに、目を凝らした。浮かんだり、沈んだりする弟の形相が、ちかちかした。胸奥からせり上がってくる熱いものが、

「たけー!」

と叫んでいた。声となつてはきだされてはいなかった。

あの日、前日の雨で、川が増水し、泥水のように濁った流れが暴れていた。遥の隣に並んでいた弟の竹秋が、突然、橋の上から消えた。

そっくり返って頭から川に落ちたのだ。一瞬のことで、何がなんだか分からず、声も出なかった。何人か一緒に並んで欄干に腰かけていた村の子供が、竹秋が、竹秋が、と大声で叫んだ。落ちたてーと金切声で叫んだ。丁度、そこへ通りかかった青年が、子供たちの異常な叫び声を聴きつけて、浮かんだり、沈んだりして流されていく竹秋めがけて飛び込んだ。

遥はその後のことは記憶になかった。青年が竹秋を抱きかかえて、必死に足る後ろ姿は、はつきり目に焼き付いている。ただその後、竹秋が寝たきりになったのはどうしてだったのか分からない。もともと竹秋は、先天性の白内障で視力が弱かった。けれども全然

見えないわけではなかったのだ。生後一年位の時に手術をうけていて、学校に上がる前にもう一度手術をうけなければならぬという話だった。

川に落ちた八月の終わり頃から、蚊帳の中で臥せっている竹秋を、藪医者だと陰口を叩かれていた、目のギョロリとした町医者が、往診に訪れるようになった。竹秋は蚊帳の中で臥せったまま、だんだん尿が出なくなっていくた。

遙は、はるやーぽんぽん、はるやーぽんぽんと、歌うように、後ろについてくる竹秋が、今も傍にいろような気がして、お前が生きていればなあーと、胸が熱くなった。いつもぶかぶかの長靴を履いて、遙の後を追いかける頭でっかちの弟だったと、生きていれば、とうに還暦も過ぎた年になっているはずなのに、亡くなった時の三歳のままの顔が浮かんで来るのだった。

「お前が生きていれば、兄姉が年老いて、何時どうなるかと心配しても、お前がいれば、まだ心強いけど、自分一人残されるのかと思うと、寂しくて、寂しくて堪らないんだよー」

と見えない相手に向かって一人ごちた。実際今回の帰郷も、介護施設に入居している姉の見舞いと、実家を継いでいる兄が、経営していたスーパーを倒産させて、精神的に不安定なことも心配だったが、三つ年上の兄が肺がんで入院していたのだが、取り敢えず退院したので、様子を見に帰ったのだった。

黒い川面に目を落としながら、遙は身勝手な考えを打ち消すように、実家への道を歩きはじめた。何時に着くとも知らせていないので、さぞびっくりするだろうと思いつながら、遙は実家の門口に立った。父や母が生きていた頃は、まっしぐらに玄関の格子戸を開けて家中に入って行った。けれども今は、一瞬の躊躇いを感じるのだった。自分のこのわだかまりは遙自身、何故なのか十分分かっている。けれど、口に出して、他人に説明出来ない、どうしようもない遙の感情なのだ。商売が順調な時に、兄が建てた以前の家より、随分こじんまりした二世帯住宅の家屋。サラリーマンの甥がローンを組んで建てた家を、自分の実家とは呼べない、よそよそしさを感じないではいられないのだった。

父が建てた家は、何の飾り気もない切妻屋根の粗末な二階家であばら家だった。本家の跡取り、長男が、戦争から帰って来たので嫁を娶り、後見人だった父が分家して建てたのだった。

遙は玄関のインターホンを押そうとして、ふっと手が止まった。一心に小さな十字架の前に、ロザリオを繰っている母が、臉の奥に浮かび、そこに重なって、寝間で布団に腹ばいになりながら、始終本を読んでいる父の顔が映し出された。懐かしさが込み上げて、古ぼけた格子の引き戸のつもりで、指先で開けようとすると、玄関が突然中から開いた。

「おー！お前、来たか」

兄の人一倍大きな声が被さってきた。

「うん。来た。突然でたまげたら」

遙はいたずらを見つけられたように照れくさく、笑って答えた。

「知らせてくんれば、駅まで迎えに行ったのに」

「ありがとう。ぶらぶら来てみたかったから」

遙はこうして人が驚いてくれるのが満更悪い気がしないのだった。黙って尋ねる醍醐味なのだ。後ろから嫂も、外側にくの字に曲がった両の膝を、痛そうに手で庇いながら、

「おめえさんかね」

と遙を見て口元をほころばせた。

「うちなんか、この頃、誰も訪ねて来らんねえからさ、誰かと思ったこて」  
嫂は幾分卑屈なニュアンスを込めた物言いだった。兄は

「はるが来たんね、また一杯飲むか」

と笑った。この家は昔から何かにかこつけてよく飲む。嫂は

「また、おめえさんはそんなこと言って！病気のことも考えれてー」

兄は何年も前から、糖尿病を患っている。今では、毎日血糖値をはかり、インスリンを打っているのだ。

「そんげのこと心配して、一年長生きしたからってどうってことないさ」

と半ば捨て鉢な気持ちを露わにして言い放った。兄の心の内が判る遙は気安く合図地はうてなかった。息子夫婦と日常生活が余りしっくりいっていないのと、倒産の憂き目にあって、何かの拍子にそれが口に出る。一年前から、息子は中国へ単身赴任になり、何が原因なのか、年寄のことを疎んじて、顧みようともしない嫁に、憤懣やるかたないのだ。年老いて頼れる肉親が、傍にいない寂しさは理解出来る。だからといって、甥夫婦の悪口をまくし立てるわけにはいかなかった。兄もそんなものを吹っ切るように

「ま、何でもいいから、一杯飲むべえ、おい、ビール冷えてねえか」

と嫂に冷蔵庫を覗かせた。そして声をひそめて、遙に

「のりも呼ぼうか？」

と言った。昔からこの家では名前の半分でしか呼ばない。後ろは省略された。紀雄は遙の三歳年上の兄だった。

「だって、具合、どうなのよ」

「ま、ちつとくらい、いいんでないの」

のんべえの論理はどこまでもルーズだった。

兄はリビングの部屋に行って電話を架けて戻って来た。

「来るって？」

「おお、ちつと来るって」

「ほんとに大丈夫かね」

と遙は首を傾げた。肺がんで放射線治療をうけているのに、気懸りではないだろうか。そんな心配をよそに、実家とは地続きの隣に住んでいる紀雄が、チャイムを鳴らしておぼんです、と言って入って来た。空いている襖を少し開いて顔を覗かせたが、やはり顔色は青白い。

「おお！おめえ、何時来たんだや」

遙と目が合うと、それでもにこやかな顔を作って言った。

「一時間前くらいかな。体、なじなの？」

「うん、まあ、今のところはな」

そう言いながら、遙が座布団を敷いた場所に胡坐をかいて座った。兄は

「ま、一杯やろんや」

紀雄がコップを持つのもどかしそうに、ビール瓶を前に突き出している。兄弟で飲めるのが殊の外うれしいのだろうと、遙は怒る気にもならない。昔は飲みだすと際限も

なく飲んでしまうので、一ヶ月の酒代も相当なものだったろう。さすがに今は年齢も年齢なので、量もそう飲まれなくなってしまったが、それぞれ病気もちなのに断酒できないでいる。

「酒止めて、一年長生きしたからって、どうってことないさ。それよか、生きているうち楽しんだ方がいいよ」

とうそぶいた。遙もその口だった。遙は娘を帝王切開で生んだ時、輸血をしたのが原因でC型肝炎になった。職場での定期健診で指摘されてから、十年以上も治療を受けてみたが、一向に数値はさがらず、病院にかかる時間が半端でなく、肝がん、肝硬変になったら、その時は、その時だなどと啖呵をきるごとく病院通いをやめてしまっている。歳をとって、だんだん女性の平均寿命に近づいて来ると、ウィルスを抱えていても、この年齢まで生きられたのだから、治療を続けなかった後ろめたさはなくなっている。そして毎晩、酒を忘れないで飲むのだった。若い時のようにめっちゃ飲みはしなくなったが、休肝日はないのだった。腹を割って何でも話し合える友達もたないから、一人、飲みながら自問自答をするのが、習性になってしまった。若い頃は、職場の同僚などに、誰彼かまわず、電話をかけたなり、飲みに誘ったりしていたが、相手が本心で付き合ってくれているのか、迷惑と想っているが仕方なく付き合ってくれているのか分からず、次第にそれが面倒に思えて家で一人飲むようになったのだった。

兄弟とは何のわだかりもなく気が許せるのだ。世間では、兄弟でも仲が悪い人もいるらしいが、遙たちは、取り立てて仲が良いわけではなかったが、喧嘩をするでもなかった。ただ、遙の夫が、会社を倒産させた時、五年間位、距離を置くようになり、付き合いがなかった。けれども、父が亡くなったり、母が亡くなって、いつとはなしにまた行き来するようになっていた。

「ほんに、ぜんがのうて、困ったもんだて」

兄は心底逼迫した声を出した。近くにスーパーの大型店が出店するようになってから、売上がさっぱり伸びなくなった。借金が膨らむばかりで、店を閉店する、すると言いながら、ずるずると引き伸ばしていた。結局どうにも立ち行かなくなって一年前に倒産してしまったのだ

父が生前、百姓は田圃を売ってはならんのだと、事ある事に言い、自分は田んぼを一反、一反と買い足して増やした父だったが、兄は借金を清算する為、それを全部売ったのだった。

「どっかに、金でも落っこちていないかのー」

兄はまるで祈るような声を出した。遙はふと思ひ出して

「昔、家の近所に一億円捨ててあったんだよ、竹やぶに」

とおどけて言った。

「えっ！ほんとか」

「そう。ほんと。宝くじが当たるとかさ」

遙はあぶくのように得た金など、後々碌なことがないと思う。そう思いながら、腹の中で

喉から手が出るように、自分もお金が欲しいと思わないではいられなかった。じいちゃんが生きていたら、すっかりなくなってしまった田圃のことを、どう言うだろうか聞いてみ

たいと思った。生きる為にはしょうがないと思うだろうか。兄を責める気は微塵もないが、自分にもものしかかっている生活の苦しさと思うと、どうしても問いただしてみたい気になる。どんなに貧乏しても、心の貧乏だけは、するんじゃないぞとも言っていた。父の言葉を思い出しながら、今の自分は心が卑しくなっていると遥は思った。

父が家長としての実権を兄に渡してしまった後だったが、ある夏、遥が里帰りして、我が家に帰る時、「俺はもう金が自由にならんから、これを持っていけ」と床の間にあがっていた親戚からの中元の砂糖を紙袋に押し込んで持たせてくれた父の顔が俄かにクローズアップした。親として情けないと思ったのか、寂しげな父の顔が、遥は時々思い出す。

「じいちゃんて、結局どういう人だったんだ」

と遥はビールを口に運びながら二人の顔を見比べた。兄は即座に

「いやあ、ほんとに豪気の人だったなあ」

と言つてビールをぐくりと音をたてて飲んだ。

「もっと計算高く生きれば、あれだけ貧乏して、苦勞しなくてすんだんじゃないの」

遥は、現在の本家が、直系の人が継いでいないことを思うと、割り切れなさを覚えるのだった。

「それが出来るような親父だったら、あれだけの人望は集まらなかったろうよ」

軽い咳をして紀雄が言った。

昭和十一年の冬、火事を出したらしい。父の長兄が焼け死に、その子供四人を後見人として育てあげた。その長男が戦争から帰って来て、嫁をとると、自分は。三反余りの田んぼをもらつて分家したのだった。火事の年に分家する筈だったが、長兄の死で思わぬ苦勞が被さつて来たのだった。母が「山だけでも、もらつておけばよかったのに」と、自分たちの苦勞の割には、僅かな見返りに、母は憤懣やるかたなかったのだろう。それ位当然のことだと事あるごとに愚痴っていたのを、遥は忘れられない。父の才覚で買った山らしいのだが、それすらも本家を継いだ甥に言い出さず、水飲み百姓に甘んじたのだ。

「親戚の人も、何も助言してくれなかったのか  
ねえ。おじさん、おばさんが大勢いるのに」

「一言もなかったらしいな」

兄は以外とあつさり言つた。恨みも辛みも何にもない声音だった。母がキリスト教に入信したのは、こんな葛藤からかも知れないと遥は思った。

母が猫いらずを飲んで自殺をはかったことがあると、姉が言っていたことがあつた。兄達も知っていることだろうか。

「ばあちゃんが猫いらずを飲んだつて、知ってる？」

「おおっ！」

二人は同時に声を上げた。

「親父も本家を守る為に必死で、自分のかあちんのことなんか、思つてやるゆとりがなかったんだろ」

「それで教会へ行き始めたのかね、ばあちゃん」

「おそらく、そうだろうな」

紀雄がコップをテーブルに置きながら伏し目がちに言つた。

「その頃、また悪いことに、たけの目が見えないんじゃないかということが判って、それどころじゃなくなったのさ」

兄は払っても、払っても、降りかかってくる

困難を呆れたように言った。

「階段の上から、一番下までころげ落ちたんだって、ねえちゃんが言ってた。」

「うん、それで目を確かめたら、どうも目が見えないんだということになって、病院へ行ったんだ。」

全く視力がないわけではなかったらしい。

「だけど、あいつ、歌が上手かったなあ！佐渡おけさなんか、そこらの民謡歌手よりすごかった！」

と兄は感心していた。遙は、いつも自分の後ろを、遙のお下がりのぶかぶかの長靴を履いて、はるやーぼんぼん、と歌いながらついてきた竹秋の声が耳元に甦ってきた。

「そして、ほんとに気のいい子だったって、姉ちゃんが言ってたよ」

「そうそう、昔、よくかんじんが物乞いに来たる。すると玄関の戸をいっはい開けて、さーさどうぞ、入ってくらっしやい。握り飯もありますよなんて言って、姉ちゃんにげんこつもらっていたんだ」

「お宮の縁の下に寝ていた小林幸三っていう男な」

そこで三人は声をたてて笑った。髭もじゃらのその男の風貌を思い出していた。

「姉ちゃんの上に男と女二人生まれて、一歳にならないうちに死んじまって、親はたけと三人も子を失ってせつなかつたろう」

六年前に娘を亡くした兄は、声を詰まらせて言った。遙は上の二人のことは、話に聞いているだけで、全然知らないが、竹秋が死んだとき、紀雄が学芸会の練習で学校に残っていた遙を迎えに来て、皆の前で号泣したのを覚えていた。

「ほんとに可愛い子だったねえ」

遙は今も竹秋が生きていればと、その思いだけが心の中を駆け巡った。姉、兄二人が死んでしまえば、自分だけが残されるのだ。そのことを思うと、居ても立っても居られない。

「死ぬ順番なんて、こうみんな年をとってくると、誰が先なんて分からないけど、年の順なら、私が一番最後まで残って、嫌だなあ」

遙は悲痛な思いだった。肺がんを患っている紀雄を前に死ぬことを話題にしているのを、紀雄はどんな気持ちで受け止めているのかと、遙は思い及ばないではなかったが、「人残される寂しさと思うと、口に出さないではいられなかった。」

「人間、一度は死ぬんだと思っても、一人になるのは堪らない」

「それもうしょうば、仕方ないさ」

兄は、珍しく、嫂の皿に、マグロの刺身を載せてやりながら、

「いっぱい食べれや、いつもはこんな贅沢できんのだから」  
少し口を歪めて言う表情に、何とも言えない侘しさが漂っていた。口に出して倒産したことをあからさまに嘆くわけではなかったが、苦悩は自ずと表情にしみ出てくるのだった。年老いてから人生の辛酸を舐めるのは、名状しがたい哀れさを誘う。遙は胸に寄せ

てくる物悲しさを吹っ切るように、ビールを煽って素知らぬ振りをきめこんだ。紀雄もそれを潮にテーブルの端に手をつけて立ち上がると

「いやー、ごっつおになった！俺も帰って休むや」

「疲れたろ？」

遥はまだ別れがたかったが、時々出る咳に、何とも言えない慄きを感じて、もう少し飲むとは、言い出せなかった。

「お前、何時帰る？」

「明日。姉ちゃんを見舞ってから帰るさ」

「そうか。いつまた会えるか分からんけど、お互い元気でいろよ」

「そうだね。体だけは元気なんだけど。全くだろんなことがあつてさ」

そこまで言つて遥ははっとした。病氣の人にいらぬ心配をかけようとしている身勝手さに

慌ててしまった。昔は、何でもかんでも、腹に溜めておくことが出来なくて、あけすけに他人にぶちまけていたのが恥ずかしく思うようになっていた。はたして紀雄は遥の顔に目を止めたが、すぐにそらした。今更、互いの家庭のあれこれをおもんばかっても仕方のないことだった。兄の家のいざこざも、本人が話す分は聞いてあげられるけれど、解決策まで相談に乗れるわけはなかった。

「ま、死ぬまで、元気にしていようよ」

そう言つて笑つた。そして兄に杓子定規に挨拶し、嫂、ごっつおになったれ、と膝が思うように動かせなくて、まごまごしている義姉に掠れた声をかけて帰って行つた。

一瞬空気が薄くなつたような、息苦しさをおぼえた。どんな別れでも感じる寂しさに浅いも深いもなかった。今の今はもっと一緒に過ごしたかった。

「紀も長くないよ。息子の話だとあと一年位だつて話だ」

兄は、ガックリ声を落として呟いた。その話は、電話の度に聞かされている。遥はその都度、覚悟はしていると答えるのだが、同じ男同士として、兄はもっとやるかたない思いにかられるのだろう。

「だけど、俺たち兄弟は仲良しで良かったなあ」

本当に表だつて争い事はしてこなかったと遥は思い返した。遥の夫が倒産した時、借金取りから逃れる為に、実家に身をよせた遥に、嫂は皮肉の一つも言うわけもなく、着の身着のままで帰ってきた義妹に、下着や衣料品を取り寄せてくれたのだった。紀雄の家族も、姉の家族も、いろいろ氣遣つてくれたのだった。

残つた三人で、ビールを飲みながら、刺身が余るから食べ、食えと、互いに勧めながら口に押し込むようにして食べている。その内、また兄は、

「のりも、あと一年ぐらいかも知れないってさ」

と同じことを言いだした。遥は、さっき言つたでしょ、とのど元まで、出かかったが、もう酔つたのかと思ひ顔色を窺つた。まだ膚色は普通で赤くはなっていない。兄も、嫂のことを「かかあも、この頃、ほんとにもうぐれて、もうぐれて」と認知症の嫂を嘆くのだが、自分も遥に電話をして来る度、同じ話を繰り返すのだった。その話は聞いたと、にべもなく言うのも悪いような氣がして、ふん、ふん、と聞いているのだが、兄も少し、もうぐれて来たんじゃないかと、電話を切つたあとで、首を傾げてしまう遥なのだった。嫂も



腹がくちくなくなったとみえて箸が進まなくなっている。遙はビールをぐっと開けて、

「そろっと、お開きにする？」

「まだ、早いぞ」

兄は、昔から飲みだすと際限がない。というよりは、今の雰囲気が終わらせたくないというのか、何時までも続けていたいのだった。どこかさみしがり屋なのかも知れない。嫂は不自由の体で、汚れた皿や小鉢をお盆に集めて、キッチンに運ぼうとしている。遙は危なっかしくて、

「ねえさん、私がやるから、座わっていてよ」

「ありがとう。ほんね、体が思うようにいかなくて」

自分でも情けなさそうな声で言った。遙とは三つしか歳が違わないのだが、凄く年上に見える。遙は、義姉さんも、私とは違った苦労を重ねてきたんだなあと、しみじみ思うのだった。遙は手早く皿などを洗い終えて座敷に戻った。遙は遙で、まだ何となく物足りなさが残っている。かなりビールを飲んだ筈なのにさっぱり酔いが回っていない。早く片付けて、日本酒をロックで飲もうと企んでいた。何時も家でやっているスタイルだった。実家とはいえ、こんな勝手をする自分が、我儘ものだなあと思わないではないが、兄達なら許してくれるという、甘えがあった。座敷にゆくと、何時の間にか兄と嫂で布団を敷いてくれていた。

「わあ！布団敷いてくれたの。自分でやったのに」

恐縮しながら、それでも図々しく

「日本酒、飲んでいいかな」

と、声だけは遠慮深げにひそめて言った。

「おーいいよ。飲めるだけ、飲めや」

兄はそう言って、自分たちの部屋へ入って行った。遙は片寄せられたテーブルに寄りかかりながら、酒を口に含んだ。苦味が口の中いっぱいに広がった。これで酔えるかなと思いつながら、故郷は遠くにありて思うものというけれど、帰ってきて、その懷に抱かれると、胸がじーんと打ち震え続けるものだと思感するのだった。グラスの中の透明な液体に、じつと目を据えると、光の反射で、花が咲いたように、キラキラと輝いた。あ、きれいと声に出かかると同時に、母の顔が滲んだ。庭や畑にいつも花をいっぱい咲かせた母。中でも夏の赤いサルビアは遙を惹きつけた。高校生の頃、「サルビアの幻想」と題して掌編を書いた覚えがある。どんな筋だったか、もうとうに忘れてしまったが、目の悪い弟の竹秋が主人公だったような気がする。

色々な花がクルクル風車のように回って、酔ったなと遙は感じた。これで眠りにつけると思いながら、手が知らず、知らずグラスを口元に持つて行く。自分ながら呆れてしまうが、酒を口に含むと、何とも言えない恍惚をおぼえてしまう。酒なんか、決して好きじゃないんだ、と言いつつがましく否定してみても、他人はそう見ない。遙は心の片隅に、根付いている哀しみを紛らわせる為に飲んでいるだけなのだ、と思っている。がそう思いながら、微かな後ろめたさを覚えるのは何故だろう。そうしてまたグラスを口に運んで、田舎に住んでいた頃が、今まで生きてきた中で一番幸せだったのだなあと思い返した。れんげの花咲く田んぼの真ん中で、大の字に寝ころび、雲の行方を追った日。学校帰りに、農道で四葉のクローバーを探した小学生の頃。同じ歳の従妹や、近所の友達と、あの村の真

ん中を流れる川で、泳ぎまくって遊び呆けた夏の日。同じ夏の日には、父がよく遙をその川に投げ込んだ。「お前の強情ぱりを直してやる」と言いながら。だがその川は、秋になると刈り取った稲をはざかけするの、舟で運ぶ川でもあった。秋の川の水は澄んで、凄烈な水の流れに揺れて、河骨が咲いていたのだった。そんな思い出の中で、風花の散る三月のある日だった。優しかった親戚のお姉さんが、自ら命を絶った知らせに号泣した。打ち震えるような悲しみを知ったのは中学生になった頃だった。人生というものをまるで分っていなかったのに、その頃から、なんとなく気持ちに気怠さを感じるようになったのも事実だった。

遙は少し酔いの回ってきた目に、酒のグラスを見据えた。まだ半分は残っているのを、もやった頭に映しながら、だるくなかった体が自然に布団の方に向いてしまった。寝転んでそのまま次の朝まで、目を覚まさなかった。

起き掛けにダイニングの方に耳をすましたが兄たちが、起きている気配は感じられなかった。遙はそっとトイレに立ち、部屋に戻って来ると、帰る用意を始めた。突然、遙が顔を出したら、姉はどんなに驚くだろう、とその驚きの顔を想像すると、胸が小躍りする。そのうち、兄と嫂の話す声がして、遙もおはようございます、と挨拶をかけながら、ダイニングのテーブルについて。

昨日の残り物のおかず、新しいみそ汁で朝食をすますと、遙は思いついて仏壇に参った。いつもなら、顔を洗うと真っ先に手を合わせる遙だったが、今朝はまだ頭が酔いどれているのだろうか。手を合わせてそれらのことを詫びながら、父と母をしのんだ。その時、兄がすぐ後に立って

「何時に帰るや」

と言った。

「何時の電車があるかね」

「新幹線か」

「いや、普通で行く」

そんなやり取りの後、ローカル線の駅まで送ってもらった。町はすっかり寂れて、活気は消え失せている。駅舎はほとんど変わっていないかったので、遙は何故かぐつと胸が詰まった。高校を卒業して、就職のためにこの駅から汽車に乗ったのだった。あの時、見送りに来た母が、涙をそっと着物の袖で拭いていたのを思い出した。感情表現の下手な母は遙に涙など見せたことなどなかったのだ。父も都会に出ることを反対したのだったが、遙は、何に駆られて故郷を後にしたのだろう。人生のわりきれなさを、嫌というほど味わう羽目になるというのに、何も考えなかったのだ。駅舎の前で車を止めると。兄は

「また帰って来いや」

「うん。ありがとう。先立つものが貯まったらね」

そこで二人は顔を見合せて笑った。兄弟四人の内、人生終わり近くなつて、二人の暮らし向きは暗闇を彷徨うように逼迫してしまっている。それを口に出して嘆くわけにもいかず、他人を呪ってみても仕様がなから、自分の馬鹿さ加減を苦笑いで誤魔化すしかないのだった。

「俺も、そのうち顔見にくくからってー」

「うん、姉ちゃんに伝えておくわ」

姉も兄を待っているだろうと思った。脚も不自由になつてから、暫く見舞いに行つていないらしかつた。突然、遙はそこで、あの川の佇まいをもう一度目に映して来なかつたことに気がついた。あれだけ竹が生きていてくれれば―と願つていたのに。最近遙は、最後の瞬間になると、何時も頭から大事なことが抜け落ちてしまう。ああ―年をとつてしまつたのだと、しみじみ胸の底から、その思いが湧き上がってきた。

竹秋のはるや―ぽんぽんの声が耳元でかすかに木霊した。遙の体ごとあの川の畔に引き戻すような竹秋の声だつた。

二〇一七年 六月